

W-3

日本諸語の形成に関する総合的アプローチ

—大陸倭語・八丈型基層語・アクセントの分布と機能の3つの観点から—

企画の趣旨

近年日本諸語の記述は精密化してきた。しかしその一方で研究の地域や対象、方法論はそれぞれに個別化・細分化が進んでいる。地域的には標準語、琉球、その他各地の諸方言に、対象は音声・音韻（なかでもアクセント）、文法、語構成などに、方法論的には方言記述／記述言語学、比較方法にはじまって対照言語学や類型論、各種の理論などへの細分化が進んでいる。

このような状況下にあって、本ワークショップでは比較方法を用いたアクセントの分析と諸方言の記述を基礎に、言語地理学、文献学、歴史学、ヒトゲノムの研究など、多様な観点から日本諸語の形成過程を総合的視点から再考しようとするものである。具体的には朝鮮半島に残された倭語であるいわゆる「高句麗地名」、朝鮮半島での言語接触、八丈島をはじめ日本各地に残るとされている日本語の「基層」、アクセントの地理的分布とその原因、アクセントの機能の特性を取り扱い、日本諸語の形成過程についての仮説を提案するとともに、仮説の問題点と今後の課題についても考察する。

比較言語学と言語地理学、言語類型論、言語接触の各分野が想定する言語変化と分布の変遷は互いに相克している。今後、真実を解き明かしていくために、フロアからのコメントや質問も伺い、議論の盛り上がることを期待したい。

構成

[1] 企画者・司会者による趣旨説明 5分

[2] 研究発表 各30分

発表者1: 「朝鮮半島における言語接触と大陸倭語」

伊藤英人 (専修大学)

発表者2: 「八丈型基層言語と日本語の重層性」

風間伸次郎 (東京外国語大学)

発表者3: 「アクセントの分布と機能からみた日本諸語の歴史」

平子達也 (南山大学)

[3] コメンテーターによるコメント 10分

斎藤成也 (国立遺伝学研究所)

[4] 全体討論 会場からの質疑応答・総括 15分

研究の背景

かつて朝鮮半島には日本語と同系の言語を話す人々がかなり大量に存在した。これは757年の地名改正による「高句麗地名」中の日本語に類似した音訓表記から明らかであり、これを滅人の言語であると考えられる。高句麗地名の研究から、この人々は現代の朝鮮語の元となった新羅の言語（の祖語）を話していた韓人と共棲していた。その後の百済及びその南の伽耶諸国と大和朝廷のきわめて密接な関係は、主にこの滅人の仲介によるものであり、そのため通訳も必要ではなかった。弥生時代からこの滅人を中心とした大陸倭語の話し手は何波にもわたって渡来し続けてきた。しかし白村江の戦以降の半島との関係悪化に伴い、倭語の話し手は列島に難民等として渡来し、交流は途絶え、半島側での倭語は消滅した。列島側では半島とは異なる国家としてのアイデンティティ確立のため、制度は一新され、半島との過去

の関係は敢えて消し去ろうとした。弥生時代初期から奈良時代初期までの千年間に朝鮮半島から日本列島へは150万人ほどの渡来があり、奈良時代初期の人口は北アジア渡来系が8割もしくはそれ以上、土着化していた縄文系が2割もしくはそれ以下の比率で混血した可能性が高いという。したがって大陸倭語の話者は何度にもわたって列島に渡来し、**日本諸語の形成**に大きな役割を果たしたことが考えられる。現在日本列島におけるアクセントの分布は周圏論的な分布を示しているが、比較言語学的の観点から想定される型の統合の歴史からはむしろ中央に位置する体系の方が祖体系であると考えられている。

各発表の要旨

1. 朝鮮半島における言語接触と大陸倭語

本発表では「**高句麗地名**」にみられる**大陸倭語**（濊語）を詳細に検討し、その漢語表記から推定される**声調**を**平安時代のアクセント**と比較しることによって両者の対応を示す。さらに朝鮮半島における濊語と韓語の長期の**言語接触**による結果、両言語は相互に多大な影響を与え合ったという説を提示する。本来類型論的に孤立語的な特徴を持っていた濊語は韓語の影響を受け、**アルタイ型の文法的性格**を強めた。一方、濊の中心地だった半島東海岸の慶尚道方言には、現代ソウル韓語と比べていくつかの**孤立語的性格**が観察される。

2. 八丈型基層言語と日本語の重層性

本発表では、無アクセントで無声化の強い諸方言（「**八丈型基層語**」と呼ぶ）が日本語のいくつかの古い特徴を保持しており、これらの諸特徴には内的関連性があると考えられる。これに対し、母音優位・有アクセントの言語（「**近畿上層語**」と呼ぶ）は遅れて広がったが、それ以前は、少なくとも八丈型基層語が広範囲に分布していたとみる。中央勢力による植民は日本海側で海岸に沿って先に進行し、東山道沿いにも遅れて進んだが、太平洋側ではなかなか進まなかった。本発表では**重層説**を唱えた先行研究を再評価し、この仮説の妥当性を**万葉集東歌**にある諸特徴、**音便**、**動物・昆虫名接辞**、**形容詞語幹の独立性**などから主張する。

3. アクセントの分布と機能からみた日本諸語の歴史

本発表では列島各地に見られる無アクセント方言の地理的分布について、現時点で考えられるシナリオを検討し、特に**アクセント（・イントネーション）の機能面**から、今後検討すべき課題を述べる。後半では、無アクセント以外のアクセントの分布について、その「**周圏的分布**」の解釈が問題となる**外輪式アクセントの分布**と**2拍名詞4類・5類のアクセントに関する問題**を取り上げる。あわせてアクセント研究において今後検討しなければならないいくつかの課題（例えば**分節音素とアクセントとの関係**など）を指摘する。

コメンテーターからのコメント

コメンテーターはヒトゲノムの専門家である。さらに言語学以外の観点から、上記3つの研究発表ならびにヤポネシア人の重層性についてコメントをいただく。